

# 児童文学作家における幼年文学への挑戦

## — いぬいとみこの場合 —

川北 典子

### 1. はじめに

児童文学作家いぬいとみこは、1924（大正13）年3月3日、静岡県で生まれ、2002（平成14）年1月16日に77歳で死去した。幼い頃から幼稚園や教会の日曜学校で文学に親しみ、小学校時代にはすでに創作を始めている。また、家庭においては、父親の影響により、セザンヌやゴッホといった西洋美術への関心も深めていったという<sup>1)</sup>。1941（昭和16）年、日本女子大学国文科に入学したが、翌年中途退学し、京都の平安女学院専攻部保育科に入学、保母資格を取得して1944（昭和19）年に卒業した。その後は、自らの母園である東京大森のめぐみ幼稚園を経て、1945（昭和20）年には、山口県柳井町の戦時保育園での勤務に就いている。

幼少期から恵まれた読書環境に育ったいぬいであつたが、児童文学への関心は、日本女子大学在学中に出あった宮沢賢治の数々の作品によるところが大きいといわれる。だが、本格的に創作を志した動機は、保母として赴任した山口県の戦時保育園での経験が多大な影響を与えていると考えられるし、また、その後の岩波少年文庫等の編集に携わった経験が、物語を創造する力をもたらしたのではないかと推測される。

幼年文学や少年少女文学、記録風文学、創作民話、絵本など、いぬいの作品は多岐にわたるが、本稿では、とりわけ保育者の視点と深いかかわりをもつ幼年文学作品に焦点を当て、一人の作家が、体験を文学作品のなかに昇華させていく道すじを辿ってみたいと考えた。作家論、作品論ともに先行研究も数多いが、それらを踏まえながら、保育者として実際に子どもたちに寄り添った体験が、いぬいとみこの作品のなかにどのように生かされているかといった考察をとおして、幼年文学における読者へのメッセージ性について明らかにしていきたい。

### 2. 幼年文学の系譜

#### (1) 児童文学における幼年文学

幼年文学は、その定義の曖昧さがしばしば指摘されているが、文字どおり幼い子どもを読者対象とした児童文学のひとつのジャンルであると考えられる。幼年童話、幼児童話など、その呼称も種々見られるが、本稿では「幼年文学」として統一する。

1950年代、「幼年期という呼びかたはまだそれほどひろく使われ親しまれている呼びかたではない<sup>2)</sup>」時期に、周郷博は、「幼年期と文学教育のために」という文章のなかで、子どもの発達に鑑みて4歳頃から「おはなし」を好むようになるといった発達の経緯を示し、「なんと微妙でふしぎな、貴重なころの発展であろう<sup>3)</sup>」と述べている。そして、「現代にふさわしい、こくのある新しい物語や民話に近い形式をもった『おはなし』が生まれでてくることはどうしても必要だと思われる<sup>4)</sup>」と新たな創作幼年文学の出現に期待を寄せている。

また、同書の中で乾孝は、3歳から7歳の子どもの文学教育について述べるなかで、幼児は、「登場人物中の、いちばん自分に近いものになりかわって、お話をいわばなかから体験する」ものであるとし、擬人化した動物・植物の物語の正当性を説いている<sup>5)</sup>。そして、擬人化した動物のほうが、人

物よりも見分けやすく覚えやすいこと、理屈抜きにその性格として読者に訴えうるところに利点を持っていることを指摘している。さらに、作家が、自身の「ゆめ」を子どもに投入しようとする自己中心性に根ざしているとして、童心主義の誤りを批判し、子どもの心性にリアルに訴えかけることのできる物語の必要性を強調した。乾は、幼年文学に携わる作家や作品を伝えるおとなの姿勢について、次のようにも述べている<sup>6)</sup>。

「自ら子どもの生活のなかにはいり、遊んだり、話したりするあいだにそのたくましい生活のよろこびを自分のものにしてことによって、子どもたちのために、真にふさわしい主題を知ることができるのである。そのばあい、子どもを自分の慰めや鑑賞の対象としてはならない。子どもは、自分自身生きている人間なのだから ー。」

当然のことながら、幼年文学は、まだ文字が読めない子どもも対象となる。そのため、周囲のおとなが子どもに「読んで聞かせる」、もしくは「語る」というかたちを取るようになる。すなわち、耳から聞く文学であることが幼年文学の特徴であるといえるが、そうだとするならば、聞いて心地よいことばの表現や理解が容易な明快な語彙の用い方等が、その創作にあたっては配慮事項となる。また、作品の選択におとなの視点が介在することから、ともすれば、教育的視点から、「子どもに与えたい」作品が高く評価される危険性を藤本芳則は指摘している<sup>7)</sup>。幼い子どもが人生で初めて出会う文学体験であるから、子どもとともに楽しい世界を共有できる物語であることを第一に考え、作品を選ぶことが、おとなには求められる。

## (2) 日本の幼年文学の流れと現状

児童文学の流れのなかで“幼年”という語が用いられたのは、明治期に遡る。「幼年世界」(明治33年創刊)「幼年画報」(明治39年創刊)などの雑誌類や、当時のお伽噺作家の第一人者である巖谷小波による教訓性や娯楽性を盛り込んだ作品の数々が挙げられる。

大正期には、幼年文学として見るべきものは少ないが、昭和に入ると、幼年童話として新たなジャンルが生まれる。幼年向け雑誌に掲載された「短く抒情的な」作品群を幼年童話と呼ぶようになったのである。なかでも、浜田広介は、自らの作品を「ひろすけ童話」と称し、幼年童話のひとつの伝統を築いたといわれる。

1960年代は、日本の児童文学史上、大きな転換期であるとされているが、幼年文学においても従来の伝統的な殻を打ち破るような新たな作品が発表された。その嚆矢となったのが、いぬいとみこの『ながいながいペンギンの話』(1957)である。幼児には短編がふさわしい、長編を楽しむだけの力はないと考えられてきた幼年文学の概念を、いぬい作品はみごとに打ち砕いた。

その後は、自らの保母経験を踏まえ保育園での子どもたちの生活を描いた中川李枝子の『いやいやえん』(1962)、自らの家庭をモデルにした松谷みよ子の『ちいさいモモちゃん』(1964)など、現在も読み継がれている物語が次々と誕生する。『ちいさいモモちゃん』のシリーズには、両親の離婚という、それまで少年少女向け児童文学でさえタブーとされてきた複雑な問題が描かれ、多方面で物議を醸した。また、ナンセンス童話と称される寺村輝夫の王さまシリーズ(1961～)や、自己のアイデンティティを求めるくまの子どもを擬人化した神沢利子の『くまの子ウーフ』(1969)などは、小学校低学年の国語教科書にも採用され、多くの読者を得てきた。

日本児童文学の古典ともいえる前述のようなすぐれた作品が、幼年文学の分野にも数多く生まれた1960～70年代の状況から考えると、近年の幼年文学の不作は否めないが、しかしながら、絵本や図鑑風のものも含めると、いわゆる幼年向けの本の出版点数自体は決して減少しているわけではなく、

文字教育や文学教育といった側面からも、各出版社がこの分野に力を入れているのは明らかである。神宮輝夫は、いぬいとみことの対談のなかで、1980年代以降の児童文学全体の停滞について、個人の名前は数多く挙げることができるが、「みんな孤立した現象」を呈しており、「流れがつかみにくい」と述べている<sup>8)</sup>。幼年文学についても、その傾向から乖離しているわけではないだろう。

1980年代以前には、いぬいとみこのような革新的な試みに挑戦する作家はいても、そのこと自体が核となり、作家がお互いに刺激しあい影響しあって新しい作品を生み出していくようなエネルギーを持っていたといえる。また、停滞期を生み出しているもう一つの原因として、いわゆる現代幼年文学を始めとする児童文学の分野に、すぐれた評論家が不在であるということも指摘できるのではないか。文学者が研究会を開いて、他の作家の作品を批評し合うといった機会も殆ど失われている。しかしながら、学童期以降の子どもの読書離れが取り沙汰されて久しい今日、まずは幼児期の耳から伝える文学の重要性を再考してみる必要があるだろう。

### 3. 人物

#### (1) 経歴

前述のように、いぬいとみこ（本名・乾富子）は、1924（大正13）年3月3日、静岡県で生まれたが、2歳のときに東京に移った。府立第六高等女学校を卒業後、1941（昭和16）年4月、日本女子大学国文科に入学。1年生のときに宮沢賢治の作品に深く感銘を受け、児童文学の道を志すが、転居のため、1942（昭和17）年6月2日付けで同校を退学している。折りしも、戦争の兆しが庶民の生活の中にも見え始め、女子大内でも軍国主義の風潮が強まってくる時期であった。兵庫県伊丹市への転居は、父親の転勤に伴うものであったが、当初はいぬいだけが東京に残り、親戚の家から大学に通っていたという。その後、『『あと三年、女子大で勉強して国語の先生になるよりは、あと二年勉強して幼稚園の保母になるほうが、お国のために早く役立てるから…』という軍国少女めいたもの』を表向きの理由として、京都の平安女学院専攻部保育科に入学したそうであるが、本音は、「毎月の『大詔奉戴日』に、エプロンモンペなるものをはかされ、左右にわけて編んだお下げの長さが、『15センチでない』と、叱られるのが耐えがたく思われた<sup>9)</sup>のだというエピソードには、いぬいの単に容姿に気遣う少女らしい思いというよりは、社会情勢に対して確固たる自己をもった女性の眼が感じられる。

また、いぬいが、このような意思を抱いたのは、大学入学後の1941（昭和16）年12月に、東京目黒の行人坂教会で洗礼を受けたことにも起因している。すでに、多感な少女期を過ごした東京府立第六高等女学校時代に、いぬいは、東洋英和の基督教の伝道に熱心な先生が港区の女学生を対象に開いている聖書の研究会にも参加し、大学入学の前年には洗礼を受けることを決めていたといわれる。その時期、基督教は、いぬいの精神的基礎となるものであったといえよう。『日本女子大に学んだ文学者たち』のなかで山根知子が示す1枚のスナップ写真には、前述のエピソードにあるように、お下げ髪に抵抗したいぬいがおかっぱ頭のままで平安女学院の制服らしき洋服を着て写っている。兵庫県伊丹市から京都への通学は、当時の交通事情を考えれば、それほど容易であったとは思えない。いぬいが平安女学院への進学を決めた理由としては、「入試はもうみな終わっていて、平安女学院だけから、まだ再試をやってもいいという答えがきたんです」としか語られてはいない<sup>10)</sup>が、戦時中であってなお基督教精神に基づく自由な校風や女学生らしい制服に惹かれたことも推察される。

その後1944（昭和19）年に保母資格を得て平安女学院を卒業したいぬいは、約2年間を実際の子どもとかわるべく保母として勤務する。最初に奉職したのは、母園でもある東京大森のめぐみ幼稚園であったが、戦争のため休園となる。そして、京都の同心幼稚園に勤務することになったが、これも空襲で廃園となってしまった。そのため、父親が転勤で転居していた山口県柳井町（現・柳井市）

の戦時保育園（ホマレ保育園）に勤めることとなった。そして、終戦間近の1945（昭和20）年8月6日、いぬいは、勤務先のホマレ保育園において、広島原爆投下を園児たちとともに見ることになるのである。その衝撃的な体験は、いぬいの心に深く影を落とし、やがて創作のモチーフともなった。また、戦争最中の何もない時代にあって、子どもたちとの生活のなかで保育者が提供できる唯一の保育内容は、「お話のもつ力」であると確信する。終戦の翌年1946（昭和21）年には、柳井教会附属柳美保育園に勤務し、この頃から児童文学雑誌に投稿を始めている。それらの過程からみると、いぬいが、保育現場で実際に子どもと関わった時間は長くはなかったが、その後の創作への意欲の原動力ともなる重要な時期であったと考えられる。

その後まもなく1950（昭和25）年には、いぬいとみこは、東京で編集の仕事に就き、児童文学作家としても作品を執筆するようになる。また、生涯独身で母親になることはなかったが、自宅近くで子ども文庫を運営し、文庫を利用する多くの子どもの姿をとおして、直接子どもたちの成長とかかわっていくことになる。編集者として、作家として、子ども文庫主宰者として、どの仕事に対しても常に精力的に活動していたいぬいとみこの姿を語る知人は多い。2002（平成14）年1月、7年間の闘病生活の後に逝去するまで、いぬいは、子どものために物語を紡ぎ、子どもとともに本の世界を愛しむ作家であった。

## (2) 編集者として

1949（昭和24）年、創作児童文学への道を志すため、いぬいは上京する。当初は、慶応義塾大学通信教育部分室に職を得る傍ら作品を投稿する生活をしていていたが、しだいに原稿依頼も入るようになった。さらに、児童文学者協会新人会に入会したことを契機に、1950（昭和25）年、佐藤暁<sup>きとる</sup>、神戸淳吉、長崎源之助らとともに、同人誌「豆の木」を刊行することになる。新時代にふさわしい児童文学の創造を掲げた同人誌であった。創刊号には、後のいぬいの代表作の一つである『木かげの家の小人たち』の原型ともいえる「樹のほわり」が掲載されている。同じく小人をモチーフとした佐藤の『だれも知らない小さな国』と発表のタイミングを競ったというエピソードは有名である。

そして、同年9月には、学生時代の友人から児童文学作家で岩波書店の編集者であった石井桃子を紹介され、岩波書店に入社する。石井桃子は、いぬいが学生生活を踏み出した日本女子大学の英文科出身であり、当時、「岩波少年文庫」の刊行に取りかかろうとしていた。その助手を務め、後には「岩波子どもの本」「岩波おはなしの本」といった外国児童文学のシリーズの編集を担当し、以来20年間岩波書店の編集者として勤務することとなる。

岩波書店編集者の時代には、ケストナーやチャペックなどの優れた外国の児童文学作家の作品に数多く出会うことによって、いぬいのなかに西欧的な感覚や幅広い知識が育っていった時期であるといえよう。西欧的なイメージと日本的なイメージが交錯する物語の表現方法は、いぬい作品の独自のファンタジー技法ともいべき特徴としても評される。「リアリズムとファンタジー、日本的なものと西欧的なもの、人物と動物 — このように対立的二要素を一つに統合しつつ、いぬい文学は、常に新しい物語の世界を開拓してきた」<sup>11)</sup>と、西田良子は高く評価している。

なお、編集者の仕事で多忙を極めながらも、いぬいは、創作にも精力的に打ち込む。前述の「豆の木」が廃刊になった後は、石井（香山）美子、野岸初子らが創刊した女性ばかりの同人誌「麦」に加わった。その3号に発表した「ツグミ」は、1954（昭和29）年に第4回児童文学者協会新人賞を受賞し、さらに5、6、7号に亘って発表された「ながいながいペンギンの話」は、後の1957（昭和32）年に毎日出版文化賞を獲得する。生来の動物好きで、高等女学校時代には野鳥にも興味を抱くようになったいぬいにとっては、これらの野鳥や動物を題材にした作品の創作方法に到達する過程は当然の流れであったともいえるが、とりわけ『ながいながいペンギンの話』は、その後の『北極のムーシカ

ミーシカ』とともに、それまで幼年文学は短編が適切とされてきた定説を覆すものであった。長編でも、幼い子どもの心を十分捉えることができるといういぬいの考えは、戦後の日本の幼年文学の新たな方向性を切り拓いていくものとなったのである。そして、その後に出あったコルネイ・チェコフスキーの『2歳から5歳まで』（1970年邦訳、理論社）における幼児の発達と認識の理論を得て、自らの考えの正当性に確信を得る。

### (3) 文庫主宰者として

1965（昭和40）年には、家庭文庫「ムーシカ文庫」を開く。1963（昭和38）年7月と翌年6月に、いぬいとみこは、ソビエトを訪れチェコフスキーに会っている。そのときにチェコフスキーから言われた「作家は子どもたちにじかに本をよんでかかせることで、ずいぶん教えられるものだ」ということばによって、文庫開設を決心したのだという。実際に自らの別荘に小さな子ども図書館を開いていたチェコフスキーの言葉には重みがあり、いぬいにとっては、「生きた子どもと交流できる、子ども図書館のもつ意味」<sup>12)</sup>を発見させてくれる貴重な出会いであった。

開設当初のムーシカ文庫は、練馬区中村橋の清和幼稚園の一室を借り、毎週1回土曜日の午後1時半から3時まで開いていた。会員は、25～35名。小学校の1、2年生が中心で、蔵書数154冊からの出発であったという。途中でおはなしの時間や新刊紹介も入れ、子どもたちの反応に一喜一憂しながらも、概ね順調な滑り出しであったといえる。この頃の様子について、いぬいは次のように述べている<sup>13)</sup>。

「成人は、子どもたちの微妙な反応や、無視ぶりや喜びなどを通して、「いい本とは何か」という基準の深さを、子どもたちといっしょに学びとっていったわけです。子どもたちに多様な好みや性格があるように、「いい本」にもまた多様な広がりや深さのあることも。」

編集者として、作家として、多忙を極めていたいぬいであったが、多くの協力者にも恵まれ、ムーシカ文庫は発展を遂げていった。

しかしながら、1969（昭和44）年2月には、清和幼稚園の改築に伴い移転を余儀なくされることとなる。そして、適切な場所が見つからず、一時は解散もやむなしと考えられたのであるが、何とか私鉄で一駅離れた富士見台にある東京相互銀行の3階ホールの一角を借りることができた。同年11月には、“文庫のきまり”もでき、在籍児120人、蔵書数は700冊を数えるまでになった。“文庫のきまり”によると、入会金は1人100円、会費は3ヶ月で100円となっている。だが、銀行という子どもたちにはそぐわないところでの間借り開催には、何かと制約も多く、6年後には移転を決意することになった。子どもが大勢利用するという条件下での移転先探しは困難を極めたが、それでもようやく練馬区の当時通称“オオカミ原っぱ”と名付けられていたところに建設中の一軒家を見つけることができた。

営利事業ではない文庫の運営に資金は貸せないとする銀行からようやくローンを組むことができ、その家を購入、1976（昭和51）年のクリスマスの日にテープカットを行う運びとなった。移転先探しの間に常時利用する子どもは30人くらいに減っていたが、当日はOBを含めて100人近くの子どもが集まって文庫の開設を喜んだという。翌77年1月20日付け毎日新聞の記事には、次のようないぬいのインタビューが掲載されている。

「執筆もあるし、文庫をやめちゃおうと思ったこともあるのですが。子どもが本を読まないといいますが、読む場所があれば読むんです。私は本が好きで、子どものときから本に恵まれて

育ったので、いま恩返ししなくちゃと思うのです。それに子どもたちとのコミュニケーションは、教えられることがとても多いのです。」

こうして、毎週土曜日の午後で開催されるムーシカ文庫は、子どもたちとともに順調に成長し、1988（昭和63）年3月に主宰者いぬいとみこの健康上、そして家庭の問題が理由でやむを得ず閉館するまで、地域の多くの子どもたちに本やおはなしの楽しさを伝え続けた。それらの詳細な活動記録は、いぬいの没後、『ムーシカ文庫の伝言板 — いぬいとみこ文庫活動の記録 — 』としてまとめられている。

幼年文学は、子どもが文字を目で追うことよりも、おとなが読み語る耳からのことばが優先される。そういう意味では、保育現場を退いていたいぬいが、生身の子どもと関わる場として、文庫を開いたことは意義のあることだと考えられる。この実践もまた、いぬいの創作の原動力となるものであっただろう。1986（昭和61）年夏には、「子どもの本世界大会」の分科会において、「外なる子ども、内なる子ども」と題して文庫運営について報告発表を行うなかで、「私にとって『子ども』とは、ここで出会った多様な性格の、生きている子どもたちのことだ」と述べている<sup>14)</sup>。

#### (4) 作家として

石井桃子らの『子どもと文学』（1960年、中央公論社）で、いぬいは小川未明の項を担当執筆している。本書は、石井桃子を代表とする、いぬいとみこ、鈴木晋一、松居直、瀬田貞二、渡辺茂男のメンバーが行ってきた児童文学についての5年間に及ぶ共同研究の成果である。いぬいは、小川未明を、近代童話開拓期に輝いていた星であると述べながらも、作家が生きた子どもを離れた「童心」のなかに自分や世界を包含させてしまうことの恐ろしさを指摘し、星が力を失い変光していった道すじを再び辿ることのないようにと戒めている。とりわけ、未明の1931（昭和6）年に書かれた作品「なんでもはいます」を、奈街三郎が「幼年童話の典型を示すもの」として高く評価したことに、義憤ともいえる感情を込めて異を唱えた。子どもは「じぶんたちを『かわいらしい』と思っている」のではなく、それはおとなの感情に過ぎないことを指摘し、未明の作品を、「幼児のもつ空想力を、外に向かってのばそうとしないで、つねに大人の考えるかわいらしい『童心』の中に包みこんできたまさに一つの典型<sup>15)</sup>と厳しく批判している。

当時の多くの作家がそうであったように、いぬいとみこも、種々の雑誌や同人誌への投稿によって、作品を生み出していく。そして、それらで培った力をもとに、1957（昭和32）年には、代表作となる『ながいながいペンギンの話』を宝文館より刊行、第11回毎日出版文化賞を受賞し、中国でも出版されることとなる。石井桃子らとの児童文学の研究会をとおして、また、岩波書店から次々と刊行されるすぐれた海外の児童文学作品に触発され、いぬいとみこの児童文学作家としての才能が開花していく時期であるといえる。1959（昭和34）年には、彼女のファンタジーの代表作といえる『木かげの家の小人たち』（中央公論社）が、1961（昭和36）年には『ながいながいペンギンの話』とならび日本の幼年文学の出発点となる『北極のムーシカミーシカ』（理論社）が出版され、児童文学作家いぬいとみこの名を確固たるものにした。

神宮輝夫との対談のなかで、いぬいは、『ながいながいペンギンの話』の創作にあたって、1953（昭和28）年に刊行された「岩波の子どもの本」から影響を受けつつも、「もう少しリアリスティックで、生きている動物が行動していく作品が書きたかった」のだと述べている<sup>16)</sup>。「お手本がどこにもなくて、書きながら進んでいく」と感じながら、3年がかりでこの物語を完成させたのだという。子どもたちの葛藤やたくましさをリアリスティックに描いた、新たな幼年文学作品の誕生であった。また、神宮がいうところの「成長し変化するという長編の骨格が、幼年文学にはじめて出てきた<sup>17)</sup>

記念すべき作品であったといえる。

手探りとはいえ、いぬいのなかには、ふたごのペンギンをとおして子どもの行動を追視することに主眼をおこうという思いがあったようだ。景色の描写や情感を必要最低限に抑え、子どもの行動を中心に無駄のない文体で表現している。幼い子どもたちには細かい描写で知らせなければ理解を得ることができないと思われていた当時の幼年文学の考え方からみれば、やはり画期的なことであるといえるだろう。「幼い人と空想を共有してすすむパターン」を、いぬいは創りあげようとしていた。それは、保育の現場に身を置き、生身の子どもを知っている彼女だからこそ考え及んだ技だといえる。

自らが開拓者となった幼年文学以外の、『木かげの家の小人たち』や『山んぼと空とぶ白い馬』といったファンタジー作品においても、また、『うみねこの空』に代表されるリアリズム作品においても、作家いぬいとみこが、子どもたちに伝えたかったであろう主旨はいつの時にも揺れ動くことなく存在する。すなわち、現実子どもたちが直面している問題であり、乗り越えていかざるを得ない壁を描いているのである。ときには、幼い子どもには難解であるとか、不必要だとかいった批判も受けながら、いぬいの姿勢が変わらなかったのは、やはり、山口県柳井の保育園で子どもたちと見てしまった原爆の閃光が常に彼女の脳裏にあったからであろう。

#### 4. 作品

『トビウオのぼうやはびょうきです』は、1982（昭和57）年に津田櫓冬の絵とともに、絵本として刊行されているが、1954（昭和29）年にはすでに「時事新報」に「トビウオのぼうやは病気です」というタイトルで発表されていた。いぬいとみこが時事新報から短編の依頼を受け、作家生活で初めての依頼原稿として書かれたものであるという。依頼原稿であるから、ある程度作品の方向性は定められていたのであろうが、そこには、いぬいが保母として子どもたちとともに体験した原爆投下の瞬間や、それに続く敗戦日本の苦難の状況が大きく影響していたことは自明である。

1954（昭和29）年3月1日、アメリカは太平洋上ビキニ環礁において水爆実験を行った。それにより、その近くでマグロ漁を行っていた日本の漁船「第5福竜丸」が被爆、乗組員が犠牲となった。前述のように、いぬいは、1945（昭和20）年8月6日に、山口県柳井から60キロ離れた広島に原爆が投下されたときの光を目撃している。だが、その被害についてはアメリカ軍の報道管制によって知らされず、いぬいが被爆者の状況を知ったのは、1951（昭和26）年に『原爆の子』（岩波書店）などの書籍からであったという。そのことに大きなショックを受けていた矢先の水爆実験のニュースに、「幼い子に、原水爆の恐ろしさを訴える童話を書きたい」と考えたのである。

作品中には「水素爆弾」という言葉は皆無である。何かわからない白いふわふわした粉を浴びたトビウオの子どもは病気になるが、それを治せる医者はおらず、薬もない。「青い 青い みなみの うみの サンゴの／はやしの かげの できごとです。／だれか トビウオの 小さい ぼうやを／たすけて やれる ひとはいないでしょうか。」と物語は締めくくられている。核の恐ろしさを幼い子どもにいかにか伝えるか。伝える必要はないといった声さえ聞かれるなかで、いぬいは、おそらく一片の迷いもなく、この作品を書いたのである。それは、文学をとおして子どもに一途な想いを届ける作家の姿勢と、子どもという存在への限りない信頼によるものであると考えられる。

子どもには難しいから伝えられないと考えるのは間違いである。難しいからこそ届けなければいけないものもある。いぬいにとっては、伝わったか伝わっていないかということよりも、われわれおとなの責任として、未来に生きる子どもたちにきちんと残しておかねばならないという思いだったのである。「児童文学や絵本の世界にも停滞があるいっぽうで、どこかで十年二十年まえ子どもだった人の間に、新しい芽が生まれているのかもしれませんが」といぬいは述べている<sup>18)</sup>。換言すれば、現在の子供たちが漠然とでも受け取るメッセージが、10年、20年後に明確なかたちになって人々の

生活を支えていくのだともいえる。

前述の「子どもの本世界大会」(第20回IBBY東京大会—1986.8.18~23)における発表の最後を、いぬいは次のような言葉で締めくくっている<sup>1)</sup>。

「世界中の子どもたちが、この「核の冬」の脅威を前にしつつ、本の楽しさ、物語を通して“小さいユートピア”を心にもちつけられることを、私は願っている。それがパンドラの箱の底に残った一つの希望の種子と信じて。」

1982(昭和57)年に、この作品が絵本として出版された背景には、未だに不会因为大国の核実験に対する怒りと祈りが根底にある。いぬいにとっては、初期の作品でありながら、晩年に到るまで、その中枢を貫く作品の一つであるといえる。

## 5. おわりに

児童文学作家いぬいとみこが創作した物語のジャンルは多岐にわたるが、本稿ではそのなかでも彼女の執筆姿勢の原点であると思われる幼年文学を取りあげた。『子どもと文学』において、小川未明の子ども不在の童心性を鋭く批判したいぬいは、幼い子どもに寄り添いその心を描こうとし、日本の戦後の幼年文学の開拓者となった。理論社の創業者であり作家でもある小宮山量平は、いぬいとみこへの追悼文のなかで、「戦後児童文学のジャンヌ・ダルク」とし、自由・平等・友愛が込められた彼女の数々の作品に対しての賛辞をおくっている。

作家としてのいぬいとみこをかたち作ったものは、まず第一に、幼い頃から生活環境として存在したたくさんのお話と、多感な学生時代に出あった宮沢賢治、そして編集者としてかかわったすぐれた海外の作品であるといえる。第二には、いぬいの作品の舞台に使われる自然豊かな大地とそこで暮らす動物たちであろう。東京育ちのいぬいではあるが、学生時代のYMCAでの野尻湖へのキャンプが大きな影響を与えていることは、回想録等からも明らかであり、後年には、黒姫山麓に山小屋を建て、そこを創作の場としている。

そして、また、いぬいの創作を支えるものとして、一つにはキリスト教の信仰、二つ目には現実の子どもとかかわる体験を挙げることができる。保育者として子どもとかかわるなかで、文庫で子どもと本を読みあうなかで、一人ひとりの子どもの姿を目の当たりにし、自らが作品をとおして伝えるべきものを明らかにしていったのだと推察される。とりわけ、保育者として子どもに寄り添う期間は短かったものの、戦争体験を主とした幼い子どもに伝えようとするメッセージの確立は、作家としてのいぬいの根底をなすものであるといえる。児童文学のなかでも、特に対象年齢が低い幼年文学の場合は、その作品が読者としての子どもたちに受け入れられるか否かは、作者が生身の幼児の姿をどれだけ理解しているかが大きな要素となっていることを、いぬいの作品群は如実に示したのである。

日本の戦後幼年文学の開拓者ということだけでも、いぬいとみこの児童文学作家としての評価は十分かもしれない。だが、この先、彼女の作品が子どもたちに読み継がれる古典となり得るためには、網膜剥離を患って以降の晩年の作品に到るまで、トータルに眺め、評価していく必要がある。とりもなおさず、それは、子どもに寄り添う視点で書かれた現代の児童文学の価値を決めていく作業になるのではないかと考える。

## 註

1) 青木生子・岩淵宏子編『日本女子大学に学んだ文学者たち』2004 翰林書房 頁290



- 2) 周郷博・与田準一編『幼児教育のために 幼年の文学』1956 国民図書刊行会 頁1
- 3) 前掲書2) 頁10
- 4) 前掲書2) 頁13
- 5) 前掲書2) 頁23
- 6) 前掲書2) 頁24
- 7) 大藤幹夫・藤本芳則編『展望 日本の幼年童話』2005 双文社出版 頁6
- 8) 神宮輝夫『現代児童文学作家対談6 いぬいとみこ／神沢利子／松谷みよ子』1990 偕成社 頁66
- 9) 前掲書1) 頁296
- 10) 前掲書8) 頁13
- 11) 大藤幹夫編『展望 日本の児童文学』1978 双文社出版 頁272
- 12) いぬいとみこ『子どもと本をむすぶもの』1974 晶文社 頁11
- 13) 前掲書12) 頁44
- 14) ムーシカ文庫の仲間たち編『ムーシカ文庫の伝言 — いぬいとみこ文庫活動の記録 —』2004 てらいんく 頁216
- 15) 石井桃子・いぬいとみこ他『子どもと文学』1967 福音館書店 頁31
- 16) 前掲書8) 頁30
- 17) 前掲書8) 頁31
- 18) 前掲書8) 頁67
- 19) 前掲書14) 頁221

## An Attempt at Creating Children's Literature : A Case of Tomiko Inui

KAWAKITA, Noriko

Tomiko Inui, a writer of children's literature, is regarded as a pioneer of Japanese children's literature for her *Nagai Nagai Penguin No Hanashi* which is one of her representative works. After acquiring the nursery teacher qualification from Childcare Department at Heian Jogakuin (St. Agnes) College, she worked at a nursery school, a kindergarten, and Iwanami Shoten as an editor of children's books. Everything that she had experienced, including the experience of running a child library until her later years is made use of in her works. The purpose of this paper is to clarify what formed Tomiko Inui as a writer, and what supported her creation, by examining how her experience of snuggling up to children as a child-care specialist helped her with the works of literature for little children.